

受賞作品

家族と社会の経済分析

—日本社会の変容と政策的対応

山重慎二著

東京大学出版会 v,309 ページ、3800 円（税別）



書評

共同体の意義 緻密に説く

東京大学教授 松井彰彦

経済学は人と人のつながりを科学するゲーム理論の発展に伴って、従来の市場の分析のための学問という枠を大きく超えて、社会現象全般を視野に収める体系を構築しつつある。本書はそういった新しい経済学の理論的成果を取り入れて、日本の現状と課題を分析した好著である。

これまで社会経済の全体像を理論経済学の立場からとらえる際には、市場と政府の関係を中心に議論が展開されるのが通例だった。本書はここに家族も含めた共同体という第3の軸を導入する。

1回きりの付き合いと見なしても分析が可能な市場取引とは異なり、共同体は規範を破った者を村八分にするなどの長期的関係を前提としなければ分析できない多くの特質を有している。著者はこの問題を固定的なメンバー間の長期的関係を分析する理論である繰り返しゲームの理論などを用いて分析する。

その上で、現代日本では、固定的なメンバーによる共同体が崩れつつあり、政府の役割の増大が必然であるとする。またそれに伴い、共同体の存在意義がさらに薄れるというフィードバックもあると論じている。

市場・共同体・政府それぞれの分析の緻密さに比べ、互いの連関の分析が手薄であるきらいがあるものの、これまで言葉や印象論で語られることが多かった壮大なピクチャーを緻密な理論で語った意義は大きく、経済学による現代日本の分析に厚みをもたらす可能性を秘めている。